

私の戦争体験記

田村 順子さん（昭和14年生まれ）

世界中、物騒で、理不尽なことばかりの連日報道に、胸が痛む日々です。

私も物心ついたころは、すでに近所の防空壕の綱渡りでした。自然豊かな東京・世田谷で五人兄弟の末っ子として生まれ、父は芸術家兼サラリーマン、母は助産師として、兄は学徒として訓練に姉は女学生として勤労奉仕に参加し、2番目と3番目の兄は長野県の寺に疎開していました。私は国民（小）学校に入学したものの途切れ途切れの登校でした。幼かった私は、姉と共に遠縁の子供のいない従兄の家（父親である従兄が戦地へ行き不在の、お嫁さん宅）に厄介になることになりました。（群馬県桐生）。姉一人なら良いですが、私は幼い故、初めは拒否され、やっとのことで受け入れてもらったようです。

転校先の不慣れさと、親戚の家には居づらかったため、下校後は遅くなるまで山菜取りで姉の帰るまで過ごしました。

母は、鈴なりの列車（人があふれるくらい乗っている）で会いにきて、帰り際には私が大泣きしながら追っていてもそれを振り切るように、電柱にかくれながら戻って行ってしまいました。そんな母に対し、「どうして何時も一人にするの？」と問い、困らせたり、恨んでいました。（そして、この地も決して安住の地ではなくなっていました）

群馬は軍事基地もあり、戦火も悪化。東京は連日、B29からの焼夷弾の雨あられの日々と聞き、父は、母の大反対を押し切り「死ぬなら一緒」と考え、ブラジルや北海道へ行って開拓して生活するという行政の勧めもあったため北海道農業開拓団として生活することを決断。途中、青森で大空襲に会い、軍司令官により青函連絡線がストップ、足止めをされ、屋根と壁の焼け残り跡の学校で、辛い辛い戦火の日を過ごしました。「東京と同じだ」空襲の中、神社の床下、田圃の物置小屋、焼き残った空き家で、人々の情けで行き当たりばったりの防空壕に入れてもらう始末でした。数日後、許可があり、やっとの思いで目的地に着いた私たち一行は、十勝地方のお寺にお世話になることになりました。

帯状の原生林を与えられ、掘立小屋が建つまで…と、その寺で厄介になる中、突然8月15日、ラジオの前に正座させられ、皆で玉音放送を聞かされました。「今更、東京大空襲の件もあり戻れない。」と、自給自足と、原生林との闘いが始まりました。ワラ屋根を利用したり、窓は本棚のガラスのトビラを利用したり、勿論、電気・水道もなく（ランプ、つるべ井戸を使った）、お風呂は近所にもらいに行き、昼はワラの上にゴザを敷いて代用等々、部落の人々に助けられながら生活しました。牛・馬・ひつじ・ニワトリ・ウサギ・猫・犬と家族が増えていきました。（川魚・マス・ヤマベ・ハツ目・カジカ・ドジョウ・フクロウ・ミミズク・ヘビ・トンビ・クマ・キツネ・イタチ・ネズミ・ウサギ 野生の動物は数え切れないほど）

厳寒の地、兄は腰の弱い父に代わり、冬期は炭坑に出稼ぎに行き、線路の除雪などを行い支えてくれました。小学校に登校するにも3キロメートル位あり、途中で線路やスキー、生乳運搬の馬ソリに助けられたりしながら、とにかく全員早朝から晩まで多忙で、勉強どころではありませんでした。物資交換のため、父は芸術を生かして、母も助産師を生かし、また、着物を放出、私も母ときこのこ（天然もの）を採って街に売りに出たりもしました。

両親の希望もあり、家族は各々、苦勞の末、私も兄弟も悪条件を乗り越え上京しました（東京で

死にたいと思っていました)。兄姉に支えられながら亡夫の理解もあって人生を送ることが出来ました。(私の家は跡形もなく道路と化していました。)

色々ありすぎて、とてもとても語りつくせません。戦後の数々の戦争映画、TVドラマの大作は「戦争」そのものでした。今は、皆が守ってくれた命に感謝しながら、役立たずになってしまった老体と過ごしている次第です。

皆様、どうか世界中が力を合わせて、仲良く「青い地球」を守れるよう、前進していってくださることを常に願っています。今宵も三日月がとても美しいです。

R7年5月

(原文のまま掲載しています)



きょうだいに囲まれて写る田村さん(前)